北海道大野記念

サイバーナイフで三叉神経痛治療

精密・高線量投与で疼痛緩和

西区の北海道大野記念病院（齋藤孝次理事長、入江伸介院長・276床）は、サイバーナイフを使った三叉神経痛の治療を開始する。道内唯一の導入施設として、高齢者などハイリスク患者などに対し、従来の手術治療よりも低侵襲な治療として活用していく。

同病院は、法人合併に伴い、孝仁会グループの基幹病院として2016年10月に現在地に新築。現名称へ変更するとともに、循環器主体から脳神経外科、整形外科、放射線治療科などを追加標榜し、幅広い診療体制を構築した。

サイバーナイフ、トモセラピー、陽子線治療装置などを含めた、全国屈指の最新機器をそろえた放射線治療装置。自在に動くロボットアームが、さまざまな方向から病巣に対して照射を行う。2つのエックス線撮影装置で撮影した検査画像を利用し、ピンポイントで治療できるのが特徴だ。

道内で唯一のサイバーナイフ

脳・頭頸部、脊椎・脊髄、胸部・腹部、骨盤部の各種腫瘍等の治療に用いており、三叉神経痛治療が10月から保険適用となったことで、新たに治療を開始する。

三叉神経痛は顔の感覚を脳に伝える三叉神経に刺激が生じ、顔に痛みが生じる。治療法は、薬物治療が第一選択で、多くの患者は薬で一時的に痛みの消失や改善がみられるものの、長期間の服用で効果が減弱するケースも少なくない。

こうした患者には外科的手術で物理的に三叉神経を刺激している原因をなくす治療を行うが、高齢者などではリスクが伴う。サイバーナイフでは、「精密照射能力と高線量投与を生かし、三叉神経自体の神経機能を低下させることで、疼痛緩和を図ることができる」と寺川雄三脳神経外科医長は説明する。

18年公表の報告によると、疼痛が消失して薬物治療が不要となるのは5割を超える。再発は25%程度にみられるが、これは従来の放射線による治療と変わらない。

効果は2~3週以内に現れるものの、数カ月かかる例もある。そのため、内服治療を継続しながら、疼痛軽減に合わせて徐々に薬を減らしていく。

治療後、顔面の知覚低下や痺れ感を訴えるケースがあるが、その他、重大な合併症はない。長期間の薬物療法で薬の効果が減弱してきたものの、手術を受けるのをためらう、薬が効くまで時間がかかりその間の苦痛に悩まされているなどの患者もいる。入江院長は「こうした患者の治療選択の一つとして、サイバーナイフの活用を他の医療機関に広く提案していきたい」と話す。